

授業者 東京学芸大学附属竹早小学校 高須 みどり

児童 東京学芸大学附属竹早小学校 一年一組三十五名

一 単元名 「ことびあそば」のじかん

二 単元の目標

様々な言葉遊びの中から自分の好きなものを選んで遊んだり、新しい遊び方を工夫したりしながら活動に浸り、言葉で遊ぶ楽しさに気付く。

三 単元の実際

○学習活動 ・児童の反応 ■教師の手立て ●授業者の解釈

★本時の解釈と次時への判断 ☆評価

【課外（月々金、朝の十分間）】

○早口言葉で遊ぶ。

■早口言葉を紹介し、教師が本気で言ってみる。

・自席で、隣の席の友達と早口言葉を聞き合う。何秒で三回言えるか、夢中で挑戦している。・教師が失敗すると、「あー」「がんばって！」・黒板の前で好きな早口言葉を披露する。言っても言えていなくても、早口言葉を楽しんでいる様子。

○ダジャレで遊ぶ。■ダジャレを短冊に書いて掲示する。

・知っているダジャレを発表する。

【第一時】

○黒板の前で、好きな早口言葉を友達に聞いてもらう。

・希望者は一人くらい。「坊主」と「柿」の早口言葉が人気。

○知っているだじゃれを発表する。

C 「ふとんがふっとんだ！」 C 「豚がぶった。」

A児：「坊主」の早口言葉を発表した。ところどころ不明瞭だが、でたらめに言うことを面白がっていた前日までと違って、早口言葉そのものを楽しんでいる。

■盛り上がって口々に言いだしたので、板書に残した。

●盛り上がってはいるが、ダジャレの面白さを共有しているというより、それ知っている！だから言いたい、という反応。

【課外（帰りの支度の時間や自宅）】

・持ち帰る物の準備をしながら、「この椅子、いいっすねえ！」聞いていた他の児童も反応し「この椅子、いいっすねえ！」と繰り返していた。・放課後、保護者との電話対応中、電話口の向こうで児童が大声で早口言葉を練習している声が聞こえた。

【第二時】

○いろいろな言葉遊びの中から、自分の好きな言葉遊びを選んで遊ぶ。

T 「実習の先生がしりとり、早口言葉、言葉集め、ダジャレのコーナーにいるから、好きなところに行って遊んでね。遊びは途中でかえてもいいですよ。」

C 「やったあ！」

T 「好きなダジャレをカードにしてみました。作ってみたい人はダジャレコーナーでどうぞ。本で探したり、誰かに聞いてもらったりしてもいいですね。」

C 「作る！」

A 児

・早口言葉コーナーに行く。「はやくちまちしようてんがい はやくちはやあるきたいかい」・お気に入りの早口言葉を一人で言ったり、実習生に聞いてもらったりしている。

●実習生から拍手をもらって、嬉しそう。私にも聞いてほしいと言ってきた。他には、「となりの竹垣に：」の早口言葉も聞かせてくれた。

■教師と一緒に言ってみた。私が間違うと、
・「ちがうちがう。はやくちまち、しようてんがい〜！」

●何だか嬉しそう。

★言い間違うことも言葉で遊ぶことの一つの要素だと気付いている。

☆自分が楽しめる言葉遊びを選ぼうとしている。

☆色々な言葉遊びを知り、その楽しさに気づこうとしている。

☆自分自身もつと言葉遊びを楽しむために、遊び方を工夫しようとしている。

【課外（かたかなの学習の時間・休み時間・下校指導中）】

「タ」のつく言葉集めで、C 「タイ」C 「鯛は固い！あ、ダジャレで言えば？」

C 「鯛を食べたい！」

・バスを待ちながら、児童二人、実習生がしりとり遊び。C 「私たちで、遊びを考えたら？たとえば、お題を出して、フルーツでしりとり。フルーツのツ！」

■フルーツ縛りは難しかったので、教師から「たべもの」に変えようという提案。

C 「月見だよ（ヒント）」 T 「つきみだんご」 C 「ごま」 C 「マンゴー」

・休み時間にC（ダジャレカードを）本にするのはどうやったらいい？」 T 「重ねて、クリップで止めるのはどう？」 C 「そうする。薄い紙を頂戴、十一枚ほしい。」

■紙を渡すと、画用紙のカードから、書き写していた。後から「本を作った家を持って帰ってもいい？」と聞きに来た。

【第三時】

○早口言葉、しりとり、ダジャレ、絵描き歌、言葉あつめの中から、好きな遊びを選んで遊ぶ。

T 「今日は、新しく絵描き歌のコーナーもあります。昨日と同じ、途中で遊びを変わってもいいです。好きな遊びを選んで遊びましょう。」

C 「絵描き歌、やりたい。」 C 「ぼくはしりとり。しりとりが好きだから。」

■その遊びに関連した絵本を、コーナーの近くに置いておいた。

■各コーナーをめぐり、一緒に遊んだり、作成物を価値づけたりした。

★実習生の手を借りずに、自分たちで遊ぶ様子が出てきた。その遊びの基本的なルールや遊び方に慣れ、遊びの楽しさに浸っている。

・ダジャレ遊びを選んだ子たちは、絵本を一緒に見ながらカードや本づくりに没頭している。

A 児

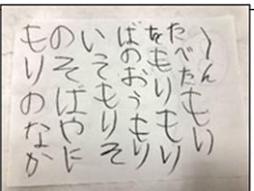
・最初は、早口言葉コーナーで遊ぶ。「となりの竹垣に〜」の早口言葉を友達と実習生と三人で合わせて言っている。

「ゆっくり過ぎてダメ、言うのが難しい！」

●楽しそうな様子。誰かと一緒に遊ぶ楽しさを感じているのだろう。

・次にダジャレコーナーでカード作り。

●作ったカードを教師に見せて、「すごく長いでしょ。」
授業中でもなかなか自分から文章を書こうとしないが、この時はたくさん文字を書いたことを嬉しそうに語ってくれた。ダジャレっぽくはないが、同音を反復することについてはつかんでいる様子。



☆言葉遊びを楽しむために、言葉进行操作しようとしている。

☆自分自身ももっと言葉遊びを楽しむために、遊び方を工夫しようとしている。

【課外（帰りの支度の時間）】

・「にゃんここにゃんこまごにゃんこひまごにゃんこ！」と言いながら歩いていく。この児童のお気に入りの早口言葉。

C 「ねえねえ、こんなダジャレあるよ、この銅像見てください、どうぞ」「おならば、さよなら」「象がいるぞう」

● 「銅像」と「おなら」のダジャレは友達が言っていたのを気に入ったらしい。「象が」のダジャレは、自分で考えたとのこと。ダジャレの面白さを楽しんでいる。また、ダジャレになる言葉を見つけることも楽しんでいる。

・実習生を言葉あつめに誘い、遊んでいる児童たち。C「（お題は）あそぶもの」
↓実「トランプ」↓C「UNO」↓C「うんてい」↓C「鉄棒」↓実「紙」↓C「サッカーボール」↓C「：（不明）」↓C「折り紙」

【第四時 一五分くらい】

○これから言葉遊びの時間を何と呼ぶかについて話し合う。

T 「言葉遊びをする時間のことを、これからなんて呼びたい？」

C 「遊ぶ時間！」C 「言葉を…」

A 児 「言葉を…：…ことごと」

C 「ことびあそば」

・多くの児童が「言葉」を使って呼び方を考えている。

● 言葉を使って遊んでいることに気付いているから、「言葉」を呼び方の中に入りたいと思っているのだろう。

T 「『言葉』が大事だということ？」

・うなずいている子どもが多い。

T 「言葉を楽しんでいる時間をイメージしている人が多いんだね。」

C 「それ（ことびあそば）が言葉遊びになっていて、いいね。」

C 「言葉で遊んでる！」

「ことびあそば」の時間と呼ぶことに決まった。

○好きな言葉遊びをする。

A 児

- ・自分が発表した「ことばをことごと」にも票が入り、まんざらでもない様子。単元名が「ことびあそび」に決まったことに不満を感じている様子はない。
- ・この日は早口言葉で遊んでいる。「難しいから、挑戦したくなるんだ。」

【第五時 三十分くらい】

○友達が今までに工夫した遊び方について、共有する。(教師からの紹介)

T 「だじゃれカードの裏に、お気に入り順に数字が書いてあって、神経衰弱みたいに三枚引くんだって。数字の合計が少ない人の勝ちという遊びを考えたんだって。」「本やカードづくりをしている人もいますね。絵描き歌を自分で考えた人もいました。」

C (黒板の前に出て、考えた絵描き歌を紹介)「でこぼこ道があって、その下に平らな道。中に豆が三つ。」

・机上に自由帳を出して描き出す子が多い。

○今からできそうな遊び方の工夫を考える。

・早口言葉とだじゃれを中心にして、そこに他の言葉遊びを組み合わせる子どもが多い。

●先に聞くことではなかった。人数や条件、テーマ設定などの工夫は、実際に遊びながら生まれてくるのだろう。

○好きな言葉遊びをする。

■実習生の頼らず自分たちで遊びを進めてもいいこと、さつき発表した工夫はこの後、試してみてもいいし、今まで通りの遊び方でも良いことを伝えた。

〈しりとりあそび〉

・自分たちで順番を決め、遊んでいる。実習生はいない。テーマはまだ無し。ある児童の言葉に「ん」が付いた時、全員で大笑いして次のしりとりを始めていた。

C 「(誰か) 早く、『ん』を言ってくれ！」

★言葉が続く面白さと「ん」が付く面白さの両方に気付いている。しりとり遊びの面白さとして、次時で紹介しよう。

〈言葉あつめ〉

C 「最初に、お題カードを作ろう。」

「音楽・学校にあるもの」「古代生物・カブトムシの名前・虫」「キラキラしているもの・食べ物・生き物」

・裏返したカードを引いて、出たお題の言葉あつめをする。言う人は指名制。
●お題によっては知らなくて答えられない子もいるからとのこと。お題を設定する難しさに気付いて、答える側の工夫を選んだのだろう。

〈ダジャレ〉

・だじゃれの本から好きなだじゃれを選んで書き写す児童と、自分（友達）が考えたダジャレをカードに書き込む子どもがいる。

C「かえるがじぶんのからだを かえる」「うしがぼうしをかぶる」「さいがさいんをかいた」

★この児童は以前から他の紙に書き溜めていたダジャレを別の紙に書き写し、本にしようとしている。自分でダジャレを考えることを楽しんでいる。次はこの子の活動を紹介しよう。

- A児：この日の遊びも、絵描き歌を選んだ。
■A児の他に三人の児童も絵描き歌を選んだ。一緒に机を囲んで遊ぶようにさせた。
C「三個のトンがり、ありました。蜂のお尻みたいなのがあつて、」
A児は、三個のトンがりはかけたが、「蜂のお尻」はうまい具合に組み合わせられない。
C「棒が一個、ハートが一つありました。」（答えはチューリップ）
A児は棒（茎）とハート（葉）を組み合わせられなかったので、友達がA児にの絵に描き加えてくれた。
T「全部つなげて描くってこと？」
A「これ（棒のところまで）が、もう終わったかと思っちゃったよ。」
●これまでうまくできなかったことには不機嫌になったり、泣いたりして活動を拒否してきた。絵描き歌は「描けなかつたこと」を受け入れている。成果を求められる学習とは違う、遊びだからこそだろう。
★言葉遊びを通して、失敗したり間違えたりすることに大らかに構えることができた。次回、言葉遊びは思い通りに遊べた時も、失敗した時も「両方、面白い」と再度クラスで共有しよう。
・A児：自分でも絵描き歌を考えてみたくなり、オニの顔を描こうとしているが、思うように描けない。
■教師の携帯でイラストを検索しようかと提案したら、自分で描きたいからいと断られた。

☆色々な言葉遊びを知り、その楽しさに気づこうとしている。

☆自分自身ももっと言葉遊びを楽しむために、遊び方を工夫しようとしている。

【課外（帰りの支度の時間）】

数人の児童が、好きなダジャレを言いに来た。

C 「高須先生の洋服、たかすぎ！」

T 「高須先生の洋服、**たかすぎ**ー、うまい！」

■言葉がかかっているところを強調しておうむ返し。

C 「このチョーク、超くさい。さっきにおいをかいだら、本当に臭かった！」

C 「はい、サラダ。これは皿だ。」

T 「このだじゃれのお気に入りはどこなの？」

C 「サラダと皿だのところが面白い、笑える。」

【第六時】

○今まで遊んだ言葉遊びの面白さを思い出す。

T 「今まで遊んだ言葉遊びは、どんところが面白かったですか？」

〈だじゃれ〉

C 「(自分で) 本にするのが面白い。」

●カードや本づくり以外の遊び方や、ダジャレを言って楽しむ面白さにも気づいてほしい。

■自分でだじゃれを考えている児童の作品を紹介する。

T 「高須先生の洋服、高すぎ！」

・「へえ」という感じで聞いている。

●ダジャレを言う面白さや聞く面白さに触れたことが、まだ少ないのだろう。

T 「このダジャレを、聞いた人が笑ってくれるように言い方を工夫できますか。」

・歌うように節をつけて言ったり、言葉の意味が掛かっている部分に勢いをつけて言ったりしている。

〈しりとり〉

C 「どんどん続いていくところ。」 C 「(言葉を) 考えて言うのが面白い。」

■「ん」の付く言葉を言ってしまう、その場にいたみんなで大笑いしていた様子を紹介した。

〈絵描き歌〉

C 「絵が描けるから面白い。」 C 「間違えても、面白い絵になる。」

■ 一度も絵描き歌をしたことのない子どもに、絵描き歌を聞きながら黒板に絵を描いてもらう。お題はうさぎだったが、全然違う絵が出来上がったので、クラスで大笑い。

・ 絵を描いた児童も、面白い絵が描けて楽しそう。

○ 好きな言葉遊びをする。

〈だじゃれ〉

C 「うめはうめえ！」（傍線高須）「カード作ってお父さんに見せるの。」

● 梅の木のイラストに一言「うめえ！」と書いてある本を見ながらダジャレカードを作っている。本は挿絵とセットで理解できるように言葉を省略して書いてあるので、この子は絵を描く代わりに「うめは」と言葉を足した。

A 児：この日の遊びも、絵描き歌を選んだ。A 児を入れて三人で遊ぶ。

C 「お皿が二つ、海苔を描いてね。」

A 「：んー、間違えた。」

C 「間違えてないよ。いろんなやり方がある。失敗とかないから。」

A 「間違えても、いっか。」

C 「(A 児のの紙を指しながら) お皿が一つありました。丸が三個ありました。」

A 「ネズミじゃない？」

C 「猫でした！」

C 「ああ！これ(A 児の書いた絵)、猫にも見えるよ。」

● A 児は自分の描いた絵と友達の絵を比べて首をひねってはいるが、普段の様子から考えると、ひどく落ち込んでいる感じはしない。友達が寄り添いながら遊んでくれたことで、安心して遊べたのだろう。

☆ 誰かと一緒に言葉遊びを楽しもうとしている。

☆ 自分自身も言葉遊びをもっと楽しむために、遊び方を工夫しようとしている。

A 児はこれまで学習や遊びの中で思い通りにならないと、気持ちの切り替えがうまくできなかった。活動に取り組む前から後ろ向きの言葉を口にするということもあったが、本単元を通して、言葉遊びは間違えてもいいものと実感し、友達が自分を受け止めてくれる経験ができた。ほかの児童たちには、これまでも親しんできたやり方で言葉遊びを楽しみながら、自分たちがより楽しめるようにお題の出し方や発言する順番を工夫しようとする姿が見られた。自分たちで新しい遊びを創造するには至らなかったのですが、今後も活動を継続し見守りたい。